

姪子

伊藤左千夫

青空文庫

麦むぎ搗つきも荒あらましになつたし、一番草も今日でお終しまいだから、お

とツつあん、熱いのに御苦労だけつと、鎌を二三丁買つてきてく
るつだいな、此この熱い盛りに山の夏なつ刈がりもやりたいし、畔あぜ草くさも刈
つねばなんねい……山刈りを一丁に草刈りを二丁ばか許り、何処どこの鍛か
冶屋じやでもえいからつて。

おやじがこういうもんだから、一と朝起きぬきに松尾へ往いつた、
松尾の兼鍛冶かねが頼みつけで、懇意だから、出来合があつたら取つ
てくる積りで、日が高くなると熱くてたまんねから、朝飯前に帰
つてくる積りで出掛けた、おらア元から朝起きが好きだ、夏でも
冬でも天氣のえい時、朝っぱらの心持つたらそらアえいもんだか

らなア、年をとつてからは冬の朝は寒くて億劫おつくうになつたけど、
其そのほか外ほかん時には朝早く起きるのが、未だいまにおれは楽しみさ。

それで其朝は何んだか知らねいが、別わけて心持のえい朝であつた、土用半ばに秋風が立つて、もう三回目で土用も明けると云う頃だから、空は鏡のように澄んでる、田のものにも畑のものにも夜露がどつぷりと降りてる、其涼しい氣持つたら話になんなつた。

腰まで裾を端しよつてな、素すつ膚足ぽだしに朝露のかかるのはえいもんさ、日中焼けるように熱いのも随分つれいがな、其熱い時でなけりや又朝っぱらのえい氣持ということもねい訳だから、世間のことは何でもみんな心の持ちよう一つのもんだ。

それから家の門を出る時にや、まだ薄暗かったが、夏は夜明けの明るくなるのが早いから、村のはずれへ出たらもう畑一枚先の人顔が分るようになった、いつでも話すこつたが、そんな時おれが、つくづく感心したのは、そら今ではあんなに仕合せをしてる、佐兵エどんの家内よ、あの人がたしか十四五の頃だな、おれは只遠い村々の眺めや空合の景色に氣をとられて、人の居るにも心づかず来ると、道端に草を刈つてた若い女が、手に持った鎌を措おいて、「お早ようございます」

と挨拶したのを見るとあの人さ、そんなころ善吉はまるつきり小作つくりであつたから、あの女も若い時から苦勞が多かつた。

村の内でも起きて居た家は半分しか無かつた、そんなに早い

に、十四五の小娘が朝草刈りをしているのだもの、おれはもう胸が一ぱいになった位だ。

「おう誰かと思ったら、おちかどんかい、お前朝草刈をするのかい、感心なこったねい」

おれがこう云つて立ち止まると、

「馴れないからよく刈れましね、荒場のおじいさんもたいそうお早くどこへいきますかい」

そう云つて莞爾にっこり笑うのさ、器量がえいというではないけど、色が白くて顔がふっくりしてるのが朝明りにほんのりしてると、ほんとに可愛い娘であつた。

お前とこのとツつあんも、何か少し加減が悪いような話だがも

うえいのかいて、聞くと、おやじが永らくぶらぶらしてますから困っていますと云う、それだからこうして朝草も刈るのかと思つたら、おれは可哀そうでならなかった、それでおれは今鎌を買いに松尾へ往くのだが、日中は熱いからと思つてこんなに早く出掛けてきたのさ、それではお前の分にも一丁買つてきてやるから、折角丹誠してくれやて、云つたら何んでも眼をうるましたようだった、其時のあの女の顔をおれは未だに覚えてる、其の後、家のおやじに話して小作米の残り三俵をまけてやった、心懸けがよかったからあの女も今はあんなに仕合せをしてる。

これでは話が横道へ這^{はい}入った、それからおれが松尾へ行きついてもまだ日が出なかった、松尾は県道筋について町めいてる処^{ところ}へ

樹木に富んだ岡を背負つてゐるから、やしきがまえ屋敷構から人の気心も純粹の百姓村とは少し違つてゐる、涼しそうな背戸山では頻しきりに蝸ひぐらしが鳴いてゐる、おれは又あの蝸の鳴くのが好きさ、どこの家でも前の往来を綺麗きれいに掃ほうきめいて、掃木目の新しい庭へ縁台を出し、隣同志話しながら煙草など吹かしてゐる、おいらのような百姓と変らない手足をしてゐる男等までが、ことば詞つかいなんか、どことなし品がえい、おれはそれを真似ようとは思わないけど、横芝や松尾やあんな町がかった所へいくと、住居の様子や男女の風俗などに氣をつけて見るのが好きだ。

兼鍛冶のそこへ往つたら、此節は忙しいものと見えて、兼公はもう鞆ふいご場に這入つて、こうこうと鞆の音をさして居た、見ると

兼公の家も氣持がよかった、軒の下は今掃いた許りに塵ちり一つ見え
 ない、家は柱も敷居も怪しくかしげては居るけれど、表手おもても裏も
 障子を明放あけはなして、畳の上を風が滑つてるように涼しい、表手の
 往来から、裏庭なすの茄子や南瓜かぼちゃの花も見え、鶏頭けいとう鳳仙ほうせん花天かてんじ
 竺牡丹くぼたんの花などが背高く咲いてるのが見える、それで兼公は平
 生花を作ることを自慢するでもなく、花が好きだなどと人に話し
 為したこともない、よくこんなにいつも花を絶やさずに作ってます
 ねと云うと、あアに家さ作って置かねいと時折仏様さ上げるのん
 困るからと云つて、あとから直ぐこういう鎌が出来ましたが一
 つ見ておくんせいと腕自慢の話だ、そんな風だからおれは元から
 兼公が好きで、何でも農具はみんな兼公に頼むことにしていた。

其朝なんか、よつぽど可笑おかしかった、兼公おれの顔を見て何と思つたか、喫びつくり驚した眼をきよろきよろさせ物も云わないで軒口へ飛んで出た、おれが兼さんお早ようと詞を掛ける、それと同年じ位に、

「旦那何んです」

とあの青白い尖とんがりぐち口の其のたまげた顔をおれの鼻つさきへ持

つてきていうのさ、兼さん何でもないよ鎌を買いに来たんだよ、日中は熱いから朝っぱらにやって来たのさ、こういうと、

「そらアよかった、まア旦那お早ようございます」と直ぐにけろりとした風で二つ三つ腰をまげた、ハハハアと笑つたかと思うと直ぐ跡から、旦那鎌なら豪せいなのが出来てます、いう内に女房

が出て来て上がり鼻へ花はなむしろ座を敷いた、兼公はおれに許り其座へ腰をかけさせ、自分は一段低い縁に腰をかけた、兼公は職人だけれど感心に人に無作法なことはしなかった。

「旦那聞いてください、わし忌ま忌ましくなんねいことがあつですよ、あの八田の吉兵工ですがね、先月中あなた、山刈と草刈と三丁宛ずつ、吟味して打ってくれちもんですから、こつちやあなた充分に骨を折って仕上げた処、旦那まア聞いて下さい其の吉兵工が一昨日来やがって、村の鍛冶に打たせりや、一丁二十錢ずつだに、お前の鎌二十二錢は高いとぬかすんです、それから癩しやくに障っちゃったんですから、お前さんの錢やお前さんの財布へしまっておけ、おれの鎌はおれの戸棚へ終しまつて措おくといつて、いきなり鎌を戸棚

へ終つちやったんです、旦那えい処へ来て下さった」そういうて兼公は六丁の鎌をおれの前へ置いた、女房は、それではよくあんめい、吉兵エさんも帰りしなには、兼さんの一酷にも困る、あとで金を持たしてよこすから、おつかアおめいが鎌を取つといてくつだいよつて、腹も立たないでそういつていったんだから、今荒場の旦那へ上げて終つてはと云つた、兼公はあアにお前がそういうなら、八田の分はおれが今日にも打つて措くべい、旦那どうぞ持つていつて下さい、外の人と違う旦那がいるってんだから、こういうから四丁と思つて往つたのだが、其六丁を持ってきた、家を出る時心持よく出ると其日はきつと何かの用が都合よくいくものだ。

思いの外に早く用が足りたし、日も昇りかけたが、蝸はまだ思
い出したように鳴いてる、つくつくほうしなどがそろそろ鳴き出
してくる、まだ熱くなるまでには、余程の間があると思つて、急
に思いついて姪子の処へ往つた。

お町が家は、松尾の東はずれでな、往来から岡の方へ余程経上
つて、小高い所にあるから一寸^{ちよつと}見ても涼しそうな家さ、おれが
いくとお町は二つの小牛を庭の柿の木の蔭^{かげ}へ繋^{つな}いで、十になる惣^そ
うりよう

領を相手に、腰巻一つになつて小牛を洗つてゐる、刈立ての青
草を籠に一ぱい小牛に当てがつて、母子がさも楽しそうに黒白斑^{まだら}
の方のやつを洗つてやつてゐる、小牛は背中を洗つて貰つて平氣に
草を食つてゐる、惣領が長い柄の柄杓^{ひしやく}で水を牛の背にかける、母

親が縄たわしで頻りに小摺こずつてやる、白い手拭を間深かに冠かぶつて、おれのいったのも気がつかずにやってる、表手の庭の方には、白らげ麦や金時大角豆などが庭一面に拵こしらへて隙間もなく干してある、一目見てお町が家も此頃は都合がえいなと思うと、おれもおのずと気も引立って、ちつと手伝おうかと声をかけた。

あらア荒場の伯父さんだよって、母子が一所にそういつて、小牛洗いはそこそこにさすが親身の挨拶は無造作なところに、云われないなつかしさが嬉しい、まア伯父さんこんな形では御挨拶も出来ない、どうぞまア足を洗つて下さい、そういうより早く水を汲くんでくれる、おれはそこまで来たから一寸寄つたのだ上つてる積りではねいと云つても、伯父さん一寸寄つていくつてそら何の

こつたかい、そんなこと云つたつて駄目だ、もうおれには口は聞かせない。

上つて見ると鏡のように拭いた摺縁すりえんは歩りくと足の下がぎしぎし鳴る位だ、お町はやがて自分も着物を着替て改つた挨拶などする、十になる児の母だけれど、町公町公と云つたのもまだつい此間の事のように、其大人ぶつた挨拶が可笑しい位だった、其内利助も朝草を山程刈つて帰つてきた、さつぱりとした麻の葉の座蒲団を影の映るような、カラ縁に敷いて、えい心持つたらなかった、伯父さん鎌を六丁買つてきて、家でばつかそんなにいるかいちもんだから、おれがこれこれだと話すと、そんなら一丁家へもおくんなさいなという、改まつて挨拶するかと思うと、あとから

直ぐ甘えたことをいう、そうされると又妙に憎くないものだよ。

あの氣転だから、話をしながら茶を^{こしら}え、用をやりながらも遠くから話しかける。

「ねい伯父さん何か上げたくもあり、そばに居て話したくもありで、何だか自分が自分でないようだ、蕎麦^{そば}饅^{うどん}でもねいし、^{どじょう}鰯の卵とじ位ではと思つても、ほんに伯父さん何にも上げるもんがねいです」

「何にもいらねいつち事よ、朝つばら不意に來た客に何がいるかい」

そういう所へ利助もきて挨拶した、よくまア伯父さん寄てくれました、今年は雨都合もよくて大分作物もえいようでなど簡単な

挨拶にも実意が見える、人間は本気になると、親身の者をなつかしがるものだ、此の調子なら利助もえい男だと思っておれも嬉しかった、お町は何か思いついたように夫に相談する、利助は黙々うなずいて、其のまま背戸山へ出て往った様だった、お町はここにこしながら、伯父さん腹がすいたでしょうが、少し待って下さい、一寸思いついた御馳走をするからって、何か手早にかまど竈に火を入れる、おれの近くへ石いし臼うすを持出し話しながら、白粉しろこを挽ひき始める、手軽気軽で、億劫な風など毛程も見せない、おれも訳なしに話に釣り込まれた。

「利助どんも大分に評判がえいからおれもすっかり安心してるよ、
もう狂あばれ出すような事あんめいね」

「そうですよ伯父さん、わたしも一頃は余程迷ったから、伯父さんに心配させましたが、去年の春頃から大へん真面目になりましたね、今年などは身しんしょう上もちつとは残りそうですよ、金で残らなくてもあの、小牛二つ育てあげればつて、此節は伯父さん、一朝に二かつぎ位草を刈りますよ、今の了りようけん簡でいつてくれればえいと思いますかね」

「実の処おれは、それを聞きたさに今日も寄つたのだ、そういう話を聞くのがおれには何よりの御馳走だ、うんお前も仕合せになった」

こんな訳で話はそれからそれと続く、利助の馬鹿を尽した事から、二人が殺すの活いかすのと幾度も大喧嘩おおげんかをやった話もあった、

それでも終いには利助から、おれがあやまるから仲直りをしてく
ろて云い出し誰れの世話にもならず、二人で仲直りした話は可笑
しかった。

おれも始めから利助の奴は、女房にやさしい処があるから見込
みがあると思つていた、博打ばくちをぶつても酒を飲んでもだ、女房の
可愛い事を知つてゐる奴なら、いつか納まりがつくものだ、世の中
に女房のいらねい人間許りは駄目なもんさ、白粉は三升許りも挽
けた、利助もいつの間にか帰つてゐる、お町は白粉を利助に渡して
自分は手輕に酒の用意をした、見ると大きな巾きんちやく着茄子を二つ
三つ丸ごと焼いて、うまく皮を剥むいたのへ、花はながつお鰹を振つて醬
油をかけたのさ、それが又なかなかうまいのだ、いつの間にそん

な事をやったか其の小手廻しのえいことと云つたら、お町は一苦
劳しただけあつて、話の筋も通つて人のあしらいもそりや感心な
もんよ。

すとなすとな音がすると思つてゐる内に、伯父さん百合餅ゆりもちですが、
一つ上つて見て下さいと云うて持つて来た。

何に話がうまいつて、どうして話どころでなかつた、積つても
見ろ、姪子甥子おいごの心意気を汲んでみろ、其餅のまずかう筈があ
るめい、山百合は花のある時が一番味がえいのだそうだ、利助は、
次手ついでがあるからつて、百合餅の重箱と鎌とを持つておれを広福寺
の裏まで送つてくれた。

おれは今六十五になるが、鯛平目たいひらめの料理で御馳走になつた事も

あるけれど、松尾の百合餅程にうまいと思つた事はない。

お町は云うまでもなく、お近でも兼公でも、未だにおれを大騒ぎしてくれる、人間はなんでも意気で以て思合つた交りをする位楽しみなことはない、そういうとお前達は直ぐとやれ旧道德だの現代的でないのと云うが、今の世にえらいと云われてる人達には、意気で人と交わるというような事はないようだね、身勝手な了簡より外ない奴は大きな面をしていても、真に自分を慕つて敬してくれる人を持てるものは恐らく少なからう、自分の都合許り考える人間は、学問があつても才智があつても財産があつても、あんまり尊いものではない。

（明治四十二年九月）

青空文庫情報

底本：「野菊の墓」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年10月25日発行

1985（昭和60）年6月10日85刷改版

1993（平成5）年6月5日97刷

入力：大野晋

校正：高橋真也

1999年2月13日公開

2005年11月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

姪子

伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>